

Elanco

ガリプラント
(グラビプラント)

犬の骨関節炎 OA

執筆・監修 藤田 幸弘

(麻布大学 獣医学部 獣医学科 小動物外科学研究室 教授)



Galliprant[®]
(grapiprant)



はじめに

犬の骨関節炎 Osteoarthritis (OA) は、ほとんどの場合、高齢の人間に認められるような病態ではなく、何かしらの関節の病気が背景にあり、その結果として生じることが多いです。その背景にある病気の原因の多くは、関節の不安定性または関節のかみ合わせの異常です。飼い主さんからの話や各種検査所見などから得られる情報から、骨関節炎が疑われた場合には、その背景にある病気を見つけることが、適切に治療を行うために重要です。

OAに対する治療法には、運動の管理、体重の管理、疼痛の管理などからなる内科療法と、骨関節炎の重症化要因となる背景の病気によっては外科療法も選択肢となります。内科療法にせよ、外科療法にせよ、期間はそれぞれの患者の症状の程度によって異なりますが、患者の生活の質を向上させるために、疼痛管理が必須であることは間違いありません。

藤田 幸弘

(麻布大学 獣医学部 獣医学科 小動物外科学研究室 教授)

Contents

人間のOAと犬のOA	3
犬が抱えるOAリスク因子	5
OAは目に見えないまま進行	7
OAと診断	11
X線検査以外の検査でしかわからない事もある	13
OAの問診	15
OAの管理をはじめ	17
あなたの愛犬へはどんなサポートが必要？	19
OAのお薬	21
参考文献一覧	22



人間のOAと犬のOA

OA=骨関節炎

「同じことと同じでないこと」

OA(骨関節炎)は、人間、獣医学ともに最も一般的に診断される関節疾患です¹。痛み、炎症、運動障害、機能的および構造的変化がこの病気の特徴であり、OAの進行に関わっています²。OAは進行すると関節および骨の変形を引き起こし、DJD(変性性関節疾患)とも呼ばれます³。

OAとDJDは、よく同義語とされていますが、実際は異なります。OAは単に軟骨の摩耗や骨の変形のことでなく、OAは関節内の炎症に伴う様々な生体物質の影響で、軟骨や骨の構造に異常が発生することです³。

人間のOAは、高齢者において痛みと障害をもたらす主な原因です^{3,4}。加齢だけではなく肥満も原因として知られており、膝OAの有病率は年齢とともに増加するため、米国での調査では20世紀半ば以降の平均寿命の上昇が、高齢者の膝のOA重症度の上昇と関連していると考えられています。膝への負荷が老化した関節組織をさらに摩耗させます⁴。



年齢



肥満

犬のOAは通常、強い遺伝的要素を伴う、多くの要因が影響する疾患として説明され、食事や運動レベルなど、各犬のライフスタイルによって悪化する可能性があります¹。

犬ではしばしば続発性に発生し、十字靭帯断裂または膝蓋骨脱臼などもともとあった関節の異常が、その後のOAの発症を誘発すると考えられています¹。



遺伝・犬種



外傷



肥満



運動レベル

人では主に加齢や肥満が原因であるのに対し^{3,4}、犬は遺伝的要素やライフスタイルも影響があり¹、もともとあった関節の異常が原因となって続発性に発生する為¹、若い犬でもリスクがあります^{2,5}。

OAは徐々に悪化していく変性性疾患で、どれくらいのスピードで重度の変形性関節症になるかは誰も予測できません。

犬が抱えるOAリスク因子



遺伝・犬種

外傷

肥満

運動レベル

年齢

様々な犬種でOAを発症しやすい傾向が報告されていますが、体重が重く、より大きな犬種はOAを発症する素因があると報告されており、純血種では特定の犬種の遺伝的問題でOAを発症するリスクが高いと考えられています¹。

発生しやすい関節

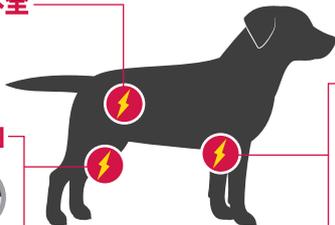
股関節形成不全



膝蓋骨脱臼



十字靭帯断裂



肘関節形成不全



離断性骨軟骨症



※関節の外傷、肥満はどの関節にもどの犬にでも起こります。

犬種別の関節疾患

バーニーズ・マウンテン・ドッグ

- 肘関節形成不全(肘異形成)
- 股関節形成不全(股異形成)
- 前十字靭帯損傷

ラブラドル・レトリバー

- 肘関節形成不全(肘異形成)
- 股関節形成不全(股異形成)
- 前十字靭帯損傷

柴犬

- 股関節形成不全(股異形成)
- 膝蓋骨脱臼

フレンチ・ブルドッグ

- 股関節形成不全(股異形成)
- 膝蓋骨脱臼

トイ・プードル

- 膝蓋骨脱臼

チワワ

- 膝蓋骨脱臼

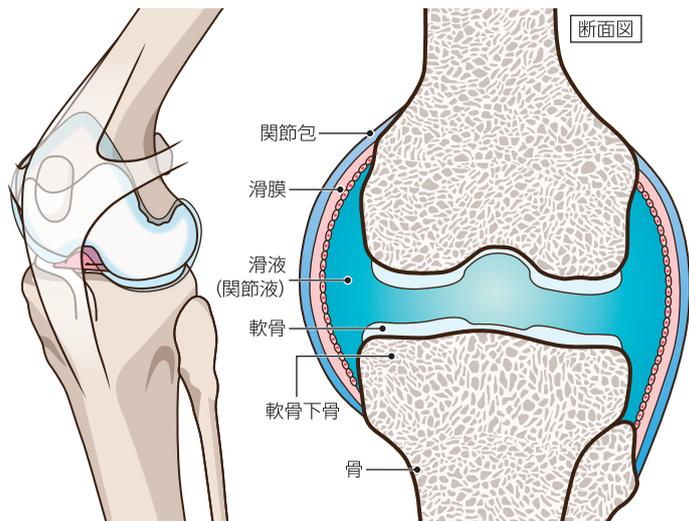
ワン! POINT

トイプードルやチワワなどの小型犬種においては、若齢時に発症した膝蓋骨内方脱臼によって、骨関節炎が発症・進行します。膝蓋骨の不安定(動揺)性が継続した場合、脛骨の内側への回転が継続し、その場合、前十字靭帯への負荷も継続し、損傷する可能性が高くなります。

大型犬種においては、成長期の整形外科的疾患として、股関節や肘関節の病気があり、これらは骨関節炎の原因疾患となります。また中年齢(6~8歳)以降、骨の形態や体重、生活環境など、多くの要因が関係しますが、前十字靭帯の損傷を発症する動物が多いです。

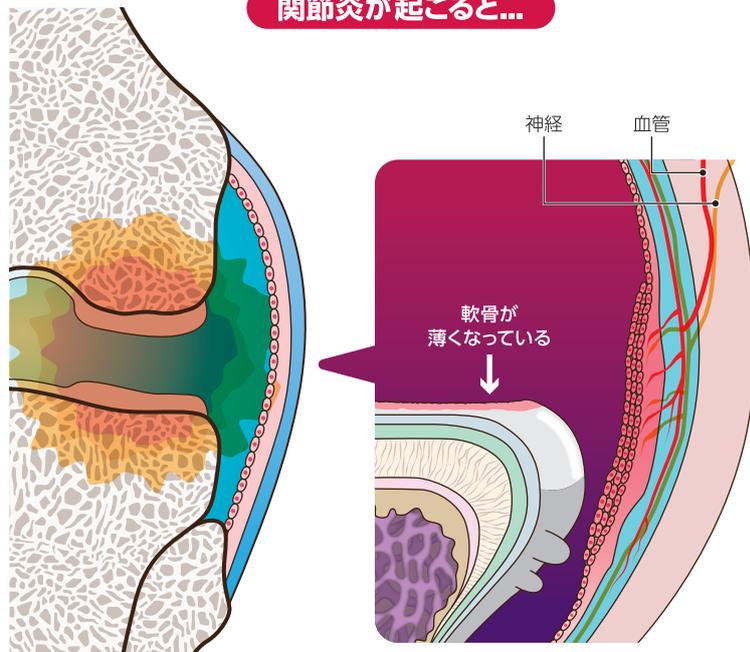
OAは目に見えないまま進行

正常な関節

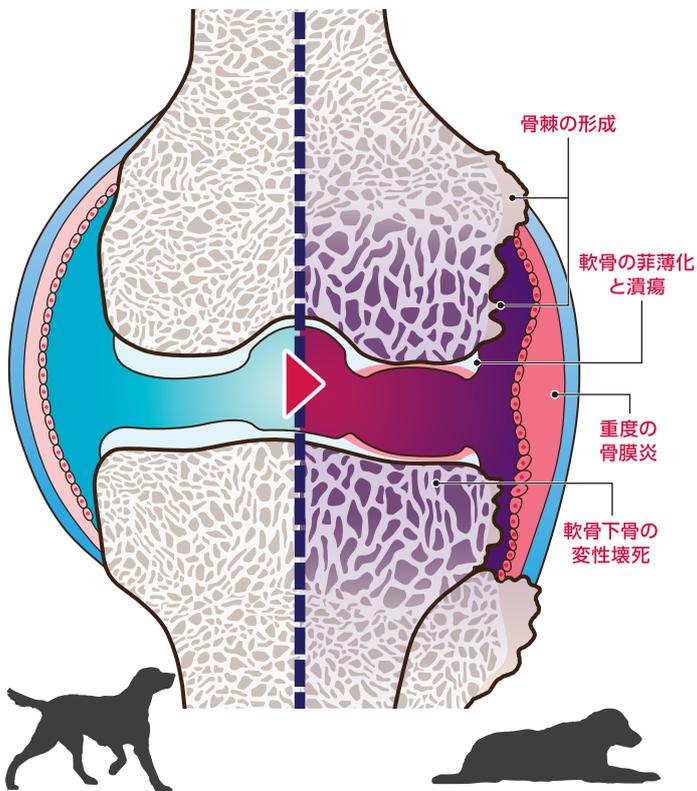


膝関節を例に見てみましょう。体重が標準よりも重い、激しい運動をするなど、犬も人間と同じように関節にかかる強い荷重や異常な力によって靭帯、軟骨、滑膜を損傷することがあります。

関節炎が起こると...



関節の中で炎症がおこると、徐々に関節の構造の変化が始まります。滑膜炎が持続することで、さらに健康な軟骨が薄くなったり、関節包が厚くなり、骨棘ができ、関節構造が変形していきます。



最終的には変形性関節症となり、軟骨下骨まで炎症が及ぶと激しい痛みにつながります。

ワン! POINT

骨関節炎がいったん発症すると、極端な表現になりますが、動物が一步一步、歩くたびに、すなわち、骨関節炎が生じている肢に体重がかかるたびに、骨関節炎はわずかながら進行すると考えて良いでしょう。

正常な軟骨に異常な負荷がかかる場合、異常な軟骨に正常な負荷がかかるときに、軟骨の損傷が悪化します。

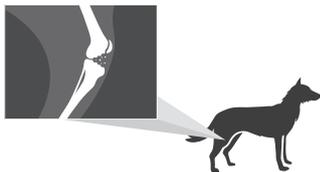


OAと診断

犬の
4頭に1頭はOAに
り患していると
言われています⁶。



残念ながら、
犬の関節炎の症例の
50%以上が、
8～13歳の犬で
診断されます⁵。



初期のOAはX線検査で検出することが難しく限界があります⁷。

X線は骨の変化や異常を知ることができますが、靭帯や軟骨の変化をはっきりとらえることはできません。OAの臨床症状とX線画像の結果とは必ずしもリンクするとは限らないと言われています⁷。

たしかに加齢、体重の増加、肥満はOAの進行と重症度に
関与していますが、若い犬の進行性の整形外科疾患とOAの
関連性が知られていても、初回診断はより高齢の犬である

ことが問題視されています²。

これは、犬が生涯の大部分を、OAがあると診断されない
ままにOAとともに生きる可能性を示しています²。

OAは原因や犬の年齢に関わらず発症し、 徐々に進行します

OAの原因

先天性

進行性の整形外科疾患
〈例〉股関節形成不全など

外傷性

後天的な原因
〈例〉外傷など

加齢性

原発性疾患
〈例〉加齢



ワン! POINT

OAの発症早期においては、骨および軟部組織の反応は
まだ乏しいと考えられます。骨関節炎の発症原因となる、関
節の不安定性やかみ合わせの異常を検出するために、整形
外科学的検査(触診)を適切に行う必要があります。

X線検査以外の検査でしか わからない事もある

1 歩様検査

病院に来たら歩き方を見て、
どの足に問題があるのか
観察します。



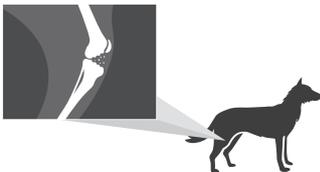
2 整形外科的検査(触診)

歩様検査で見つけた足の
どの関節に問題があるのか、
どの程度痛みがあるのか、
腫れているのか触診します。



3 X線検査

触診検査で見つけた異常
部位のX線を取り、骨に異常が
ないかを確認します。



ワン! POINT

整形外科的検査(触診)にて、関節の異常を検出したとしても、とくに発症早期においては、X線検査では異常所見が検出されないこともあります。



0Aの問診

日々の行動の変化に気が付いて
あげられるのはご家族しかいません。
問診は重要な検査の一つです。

- 以前は、興味を持っていた遊びをしなくなっていますか？(例:ボール投げなど)
- 機敏な反応が減少していませんか？
- 散歩の歩行速度が遅くなっていませんか？
- 寝ていることが多くなっていませんか？
- 階段を下り(上り)づらそうにいませんか？
- ソファーに飛び乗ったり、車に乗りづらそうにいませんか？
- 立ち上がりにくそうにしたり、伏せをしづらいような様子はありませんか？
- 体重が増加していませんか？
- 家に帰った時に玄関で出迎えて喜ぶことが減っていませんか？

ためらう姿はありませんか？



一般的な活動



生活の中での楽しみ



階段の上り下り



起立する



歩く



走る

OAの管理をはじめめる

痛いよ!と鳴いている日に「痛み止め」を飲むだけで治療は終わりではありません。



痛みのサイン

痛みのサインが出ていないか、犬の行動をよく観察しましょう。



お薬

関節内の炎症と痛みを抑えるため、先生に指示された消炎鎮痛剤(痛み止め)のお薬をきちんと与えましょう。



体重管理

体重が重すぎるようであれば、適正体重にするために食事の計画を立てましょう。



リハビリテーション

関節の異常で足を動かしにくい場合は、適切なリハビリを指導してもらいましょう。



サプリメント

関節の健康を補助するサプリメントを継続することもいいでしょう。

❗ OAを悪化させない日常生活の注意点

室内の床で滑らないようにカーペットを敷く。

適正な体重を保つため、食事量やおやつのに量を付ける。

激しい運動は避け、筋力が落ちないように適度に散歩を行う。



ワン! POINT

OAの内科療法として、運動の管理(調整)、体重の管理(制限)、そして、疼痛の管理が含まれます。OAと診断され、症状が認められる場合、非日常的な動きはできるだけ避けることが重要です。

しかしながら、滑りにくい場所であれば、リードを装着した上で、飼い主さんの管理できるスピードで歩く、といった程度の運動は、関節の機能を保持する目的として、適切であると思われます。万が一、症状が悪化した場合には、かかりつけの動物病院で診察を受け、適切な処置を行う必要があります。

あなたの愛犬へはどんなサポートが必要？

OAの診断ツール (COAST: Canine Osteoarthritis Staging Tool²)

著名な整形外科や疼痛管理専門獣医師によって作成されたステージ分類のための基準であり、OAの早期診断やリスクを感知するために開発された診断ツールです。



ステージ0~1 発症前のOA

外傷や進行性の整形外科疾患による関節への侵襲。



ステージ2 軽度のOA

散歩や遊んだりすることに以前より興味が薄れている。獣医師の触診によりOAの徴候がみられる。



ステージ3 中等度のOA

跛行があり、階段を上ったり、容易に立ち上がったり伏せたりできない。



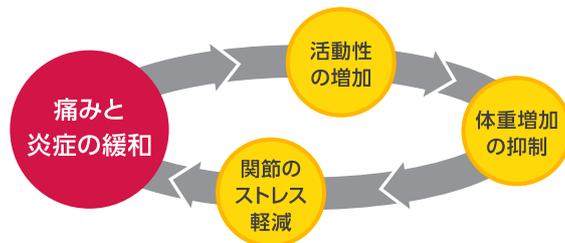
ステージ4 重度のOA

持続的な痛みがあり、ほとんどの通常活動が妨げられている。OAの徴候が常時みられる。

犬は人間の言葉は話せません。しかし、人でも見られるような行動の変化やサインはあります。**かかりつけの獣医さんと相談し、無理のない治療計画を立てましょう。**

すでに何らかの症状が出ている場合は、専門医を紹介してもらい、診察してもらう事も必要かもしれません。

OAは早期から適切な長期ケア計画を開始し、悪循環を断ち切り、炎症と痛みを緩和する事も必要です。



タイムリーな疼痛管理は、複合的なOA管理プランにおいて重要です。

- 痛みを軽減
- 効果的なリハビリで筋力や安定性を改善し、体重管理が可能

0Aのお薬



消炎鎮痛剤

(COX阻害性NSAIDs、EP4拮抗薬*)

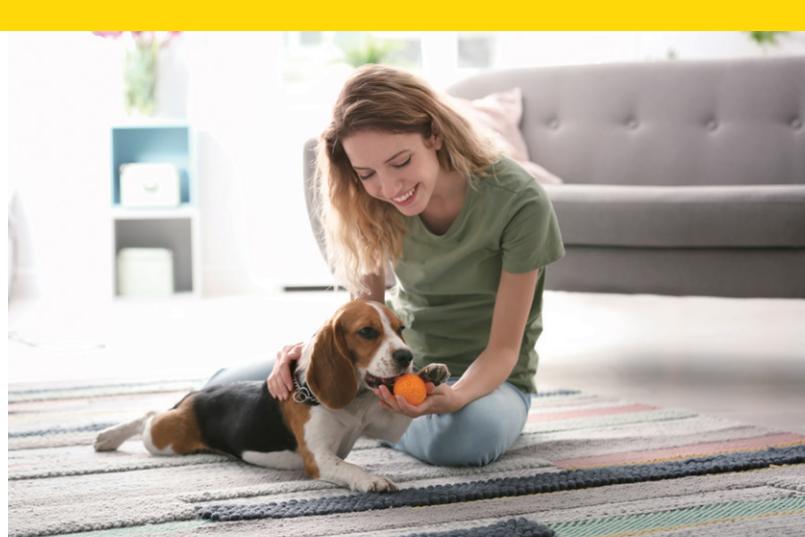
炎症を抑え痛みをとるために服用します。

日常生活の行動や歩行、触診時の痛みなどが改善するまで、
長期間投薬が必要な場合もあります。
獣医師の指示に従い投薬してください。

⚠ 注意

投薬の途中で、食欲がなくなる、下痢や嘔吐などが見られた場合は、無理に継続せず投薬を中止し、かかりつけ医に相談してください。

* EP4拮抗薬は新しいタイプの消炎鎮痛剤で犬の0Aの炎症と痛みに関わる受容体EP4を直接ブロックします。



参考文献

1. Katharine L. Anderson, et al. Prevalence, duration and risk factors for appendicular osteoarthritis in a UK dog population under primary veterinary care. *Sci Rep.* 2018; 8: 5641.
2. Cachon T, et al. Face validity of a proposed tool for staging canine osteoarthritis: Canine OsteoArthritis Staging Tool (COAST). *Vet J.* 2018 May; 235:1-8.
3. Richard F. Loeser, et al. Osteoarthritis: A Disease of the Joint as an Organ. *Arthritis Rheum.* 2012 Jun; 64(6):1697-707.
4. Ian J. Wallace, et al. Knee osteoarthritis has doubled in prevalence since the mid-20th century. *Proc Natl Acad Sci U S A.* 2017 Aug 29; 114(35): 9332-9336.
5. Mele E. Epidemiology of osteoarthritis. *Veterinary Focus.* 2007; Vol 17 No 3
6. Duncan Lascelles, Joint Pain in Pet Dogs and Cats. *International Association for the Study of Pain.* 2016 Fact sheet No.9
7. Gareth M C Jones, et al. Moving Beyond the Limits of Detection: The Past, the Present, and the Future of Diagnostic Imaging in Canine Osteoarthritis. *Front Vet Sci.* 2022; 9: 789898.